

うたそら

第7号

2022
March

3

一周年!!

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄「淡」	21
一首評「そらよみ」	26
短歌リレーコラム「望遠鏡」	28
リレーエッセイ「いちごいちえ」	30
次回予告・編集後記	31

うたそら 第7号

発行：2022.03.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

次号予告 うたそら 第8号

連作欄 8首の連作 自由詠
 テーマ詠欄 「新」
 一首評「そらよみ」
 短歌リレーコラム「望遠鏡」
 リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

第8号 '22 4/30(土) 24時
 ●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「新」1首

第9号 '22 6/30(木) 24時
 ●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「色」1首

編集後記

雪の多い2月も終わり、すこしずつ空気に春の香りが混ざり始める今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。体調など崩されていませんか。

このたびは、短歌誌「うたそら」2年目の始まりとなります第7号へのご寄稿をいただきまして、ありがとうございます。ご参加くださった皆さまに心より感謝申し上げます。第7号の参加歌人さまは95名、連作欄には69名、テーマ詠には80名のご投稿をいただきました。

今回のテーマ詠のお題は「淡」。かすかに春を含んだ淡い空気感、まだ残る淡雪——それぞれの地域の気候にあわせて詠まれた歌や、淡い感情、淡い色など、さまざまな「淡」の短歌が集まりました。

一首評「そらよみ」は第6回となりました。歌を投稿するだけではなく、読んで感想を伝える／もらうことで、得られる気づきや喜びもあるのではと思います。ぜひ次回もご参加ください。

短歌なリレーコラムでバトンを引き継いでくださったのは門脇篤史さん、リレーエッセイは新妻望さんが書いてくださいました。ありがとうございます！

今号も皆さまのおかげで読み応えのある「うたそら」をお届けすることができました。どうぞごゆっくりお楽しみください。

「うたそら」では Twitter での呟きもお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号は4月末×切の5月初旬発行、テーマ詠のお題は「新」です。新緑の美しい季節、新しい生活にも慣れ始めたころでしょうか。新しい環境、新しい挑戦など、さまざまな作品をお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ



うたそら 第7号

ご参加
 いただいた
 みなさん (五十音順)

あき子 @ponko_san
 麻倉ゆえ @AsakuraYue
 阿部蓮南 @renai815
 天野うずめ @uzume_no_hijin
 雨虎俊寛 @amefurashi3107
 新井きわ @teresia0419
 有村桔梗 @chattehoire_k
 歩歩 @subperf
 五十子尚夏 @Hiter57
 池田竜男 @Shimsyutu2020
 石橋葉子 @Ejshimada
 宇祖田都子 @hswelt
 卯波 @OotsuboMeiju
 泳二
 大坪命樹

岡田奈紀佐 @spice16g
 岡田 藍 @kakomiyano
 音平まご @nandenonaihi16
 がね @amicus08
 瀬井井戸 @kareido1111
 河岸景都 @kate_kawagishi
 神崎 梓 @v_knz
 神定 克季 @kanjio3
 菊池洋勝 @kkutitg
 君村類 @kmmr_r09
 玖嶋さくら @sacula_tanka
 くらだたけし @tkuro2016
 桑井ゆた @Kuwaitah
 紅坂紫 @YukariKousaka
 (各々：洲本市) @57577_77575
 Koha @trn96
 咲兵衛 @izumitakeishi
 さくら(いり) @sacra_jico
 佐藤水魚 @satohio_tanka
 佐藤博之 @z_bozhi
 汐射ハルカ @haru_c17h17c12n
 塩本抄 @tankanosio
 紫苑 @purple_aster
 鹿ヶ谷街庵 @ikasamabakuchi
 西鎮 @xi_zhen_jvUT
 雀来豆 @jacksbeans2
 白石夜花 @yohana_no_sekai
 鈴木ベルキ @pandakirinkaba

諏訪灯 @skydew
 たえなかず @suzusuzu2009
 多香子 @takahashi_ry5
 高橋良 @sukakinenbi
 田中翠香 @kohagi_tw
 千原こはぎ @greenchar2
 Chori @gesshodo
 月硝子 @croissant_hey_z
 こもえ夕夏 @umi_no_curtain
 ナイアガフス @nakam8
 中村成志 @nakamurabot
 ナカムラロボ @jacky24fay
 西淳子 @smakra
 西村曜 @nekonokanae_uta
 ネコノカナエ @aieohimeco
 薄荷。 @jasumin_texti
 葉月じゃすみん @nao-hamura
 葉村直 @k_hayatsuki
 早月くう @may_spica_358
 雛河麦 @HksbNR4wv1wj8M
 こんすい @HXY3MO3WHXbAyl
 平塚さつき @FYAkMQkxwH7KDG
 平本文 @hirochin_dos
 廣珍堂 @hiwa_towa
 飛和 @Ync6rjEz9wq
 笛地静恵 @momoka_fukuyama
 福山桃歌 @k5RX1A8F46akn
 藤森岬

細川エリカ @luyukasen
 真崎あや @ayayank
 まさけ @mskpompomfuwa23
 御糸さち @MEATsachi
 深影コトハ @coroha_mikage
 みなみあ @minamiasouth
 衣未 @mimi_4567
 水也 @m_ya-o
 虫武一俊 @mushitake
 六浦筆の助 @Tofakumutun5057
 六厥めれう @mereumunai
 村田一広 @mucci2022
 杜崎ひろく @kousei_tsurun
 杜野詩季 @4ktrankass
 矢野目知桂 @_yu_ca_li_

計 95 名

たくさんのご参加
 ありがとうございます！

連作欄 8首の連作

#うたそう 自由詠

差してくる光短く気がつけば完成している高層マンション
ブランコがない公園を通り過ぎいつもと同じ朝を感じる
新しい言葉を知れて嬉しくて何度も何度も連呼している
情報が正しかったらそれでいい適当に送るLINEスタンプ
雨が降る予報の街の国道を切り裂いていくサイレンの音
役割を果たせなかったヘアピンが置かれる忘れ物ボックスに
地下にあるファミリーマートが神様の救いのごとき明るさだった
リニューアル工事のための売り尽くしセール開催 春まだ遠し

光

天野うずめ

「ちゃん」を打つ手間の省けたメッセージ 力の抜けた「おはよう」が来る
表現は大きくしたい初めてのノートに書いた名前のように
いいなって感じる言葉の組み合わせ セットアップのトップスを着る
ひとまわり離れた人と気が合っても干支占いはなかったみたい
高い曲を見つけたら連絡するね大体が君にも出せるから
長文に興味はあるけど接続詞まで面白い君の話は
花が咲く話の種は繋がってスマホの世界 今この世界
ラングドシャからはみ出したチョコレートいちごいちえは秘密に溢れる

ストロベリー

阿部蓮南

新妻望



未熟だとぼくを笑った過去たちに未来のことを聞いてまわった

偉大な先人たちは、そんなぼくのことさえも許してくれるだろうか。

こうして嫌いなこと、苦手なことも言葉にして人に伝えることができるのなら、方程式が解けなくなつて悪くはないかな、と思っっている。いまを生きて、これから先の未来を見ることができるのなら、歴史に残らなくなつて悪くはないかな、と思っっている。

先のことを考えて不安になることも多いけれど、未来を案じることができるようになるのも、いま生きて呼吸をしているからだ。

だけど。

過去よりも今を、想像よりも現実を鮮明に見たいと思つた。

卒業式のその日から一人暮らしを始めて、自分ひとりの力で生活をするようになってから四年が経とうとしている。

あのとき大学へ行くことを選んだ級友たちの多くは、ほどなくして大学を卒業するのだろう。あのとときのぼくへの選択は正しかったか、今でもわからない。

ぼくはついに大学受験をしなかった。

単純に、もう死んだ人間に興味がなかったのだ。数学は苦手で、歴史は嫌いだつた。

教科書を開いても、何かすごいことを成し遂げた人の名前ばかりが平たく貼り付いていて、それだけだと思つた。いつか修学旅行で見た立派な建物たちも、ぼくには平面のように見えていた。ぼくは將軍がいつ何を成し遂げたかではなく、何に失敗してきたか、どんな風に笑う人だったかを知りたかつた。偉い人だけでなく、農民の生活だつて知りたかつた。ぼくたちはきつと偉大ではないし、実際にも現実味がなくて、のめり込めなかつた。

それが良いという人ももちろんいるだろう。だけど、想像力を働かせるよりも、現在進行形で動いていく現代の街を歩いているほうが、ぼくにとつてはよっぽど面白かつた。電車の中では、単語帳よりも窓の外ばかり見ていた。

文学や哲学の方面には興味があつたけれど、結局は歴史を学ぶことが大部分になるのだと思うと、どうにも気持ちが悪くさくさしてしまつて、学業に対しての意欲が薄れていった。

これは、言い訳なのだろうか。

歴史という教科がずっと嫌いだつた。

たいてい国語は上位、数学は赤点という典型的な文系学生のひとりとして過ごしていたが、日本史も世界史もからきしで、当時はなかなか大変な思いをしたのをよく覚えている。

数学の場合、向き合つても向き合つても理解ができないう感覚だつたが、ぼくにとつての歴史は、そもそも向き合う気が起きないものだつた。高校の選択授業では、日本史や世界史の代わりに生物を取つたりしていた。現代社会や地学もそれなりに面白かつた記憶がある。普通に落ちこぼれではあつたものの、暗記自体はたぶんそこまで苦手ではなかつたと思う。



リレーエッセイ

いちい

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ

歴史

書き手

新妻望

こんな夜はズボンにチョコをつけたまま月の明かりで踊りませんか
僕のことまるで見てない横顔の長いまつ毛に今ごろ気づく
リフトオフ 夜のまんなか貫いてきみを火星に連れてゆこうか
帰るといふ「以上未満」のきみへ向けグッドサインを返してしまふ
彼のことなんて話すな青白い天の穴まできみを攫さらおう
きみが乗る反対側の最終が言いそびれたことベルで遮る
ここからは余熱がつづく きみがいま僕の前から去ろうとしてる
確かめるようなことすらしなかった一番星を見つけてたのに

暴力的な春

新井きわ

破滅的な春だ オロナミン片手に次に君に逢うまでに腹筋を割る
遮断桿上があれば我が町が君の町へなだれ込む起点となる踏切り
最近の開花宣言も早くなり前のめりで生きる 片っ端から春
ミニスカの卵みtainな膝が氾濫す朝の電車は春の装い
春雷のような恋なのにくちびるを重ねねばやわらかな不協和音
心中の自開を拒むように胸元に釦多きブラウスを着る
台風でパニエみたいに曲がった傘をさす 何処かで鳴っているサイレン
何度でも狙われた祭りの出目金サクラ散る頃ゆらりと逝かん

すこしづつつめたき空気に混ざりくるヒヤシンスとふ春の足音
オリオン座あんまりしづかにひかるから泣き出しさうになる帰り道
さみしさはすこし遅れる 雷の音が鳴り出すまでを数へる
冬の野の風をとほして立ちつくすわたくしといふ一箇の楽器
細胞のひとつひとつにしまはれたあなたの記憶がときどき歌ふ
ほんたう？と訊けばあなたはほんたうとほんたうの嘘を教へてくれる
ぺとぺとになつたゆびさき舐めてゆく 感情なんて面倒くさいね
ひとりでは捌ききれない感情に名前をつけてやる二月尽

Rendez-vous

五十子尚夏

着る毛布の内にて思う人類と月とのうつくしき邂逅ランデヴウを
悪夢なのだろうかこれは薔薇色の新春シャンソンショーを観ている
凍てし冬の水族館に皇帝ペンギンエンペラーたちの葬列を見ゆ
夢を問わば女優志望と答えたり少女は眉をわずかに上げて
昇降機に乗り合う人がどことなく似ている古畑任三郎に
冬銀河あわれまことに自転車の崩れてしまいそうなるかたち
サイリウム単色に燃ゆる泡沫の夜を震わせて押しの卒業
Zinnの分からぬ齡となりて春まだき風にわたしは透けそうになる

食べ物を一首に仕立て上げる経路はさまざま
です。味や香りや見た目を直球で詠むもよし、
料理の背後にある時間や文化を詠むもよし、個
人的な感慨に落とし込むもよし。そこには眼前
の料理をさらに調理するような楽しさがありま
す。

レトルトのカレーをひとり食べているわたし
は換気扇から夜へ 辻聡之『あしたの孵化』
カップ麺のふたに小石をのせて待つ今日のもつ
とも高いところで 谷とも子『やはらかい水』

人事などもわわとして春の夜のサッポロ一番
やはり塩あぢ 野田かおり『風を待つ日の』

生きていく上でどうしても頼ってしまうイン
スタント食品。癖になるジャンキーな美味しさ
があり、簡便便利で、そして短歌に詠み込んで
もおもしろいのです。

辻さんの歌は結句に意外性があります。自宅
でひとりレトルトカレーを食べている、そこま
では至極普通ですが、「わたし」は換気扇を経て
夜に出ていくといいます。「夜へ」は奇想に近い
結語ですが、「換気扇から」という措辞が現実と
の地続き感を担保しているように思います。

谷さんの歌は登山の歌でしょうか。山頂（あ
るいはそれに準ずる高所）でカップ麺を食べた、
意味としてはシンプルですが、「今日のもつとも
高いところ」という言い方や、蓋に載せている
小石によって高揚感のようなものが伝わってき
ます。お湯を入れて待っている間、さぞかし絶
景が見渡せそうな気がします。

野田さんの歌は固有名詞がおもしろい。「もわ
もわ」としている人事、異動発令の手前なのか
もしれません。予想と噂が飛び交っている職場
から帰宅してサッポロ一番の塩味を食べる。「や
はり」が効いていて、サッポロ一番のどの味が
よいか論争を引き受けています。「もわもわと」
している上の句を結句の断定が引き取る。また、
「もわもわ」は人事に掛っているのだけど、臍な
春の夜にも、サッポロ一番が立てる湯気にも、
もしかしたらサッポロ一番何味がいいか論争に
も、うつすらと掛かっているような気がします。
インスタント食品は大量生産。題材そのものに
個性を見出すのが難しい部分はありますが、
作者側の個性を仮託することでおもしろいもの
が顕現することがあるように思います。

夕立に背を向けながら牛丼を食べた松屋が懐
かしくなる 土岐友浩『僕は行くよ』

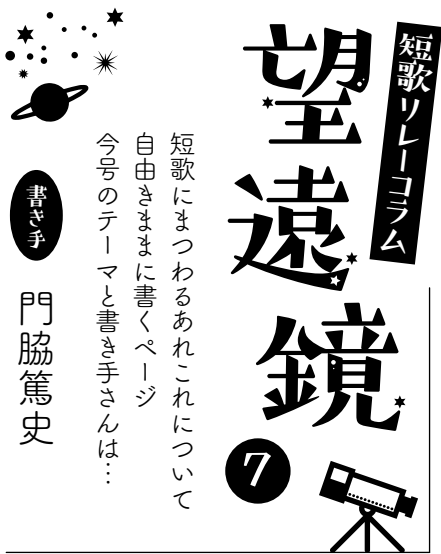
「ポンデあげる」ときみがちぎってるポン・
デ・リングのたまの一つぶ

西村曜『コンビニに生まれかわってしまっても』
チェーン店での記憶を刺激する二首。
土岐さんの歌にはノスタルジーが溢れます。
牛丼屋独特の形状のカウンター席の描写として、
「夕立に背を向けながら」は的確であると同時に、
個別具体的な記憶に結びついている感じがして、
結句の懐かしさと響きあいます。

西村さんの歌はいかにもありそうな感じがし
ます。その場面に出くわすのが私でもおかしく
ないし、なんならそういう会話をだれかとした
ことがあるような気がしてきます。一ポンデ、
響きが単位つぼくて妙に面白い。

食べ物の歌は楽しい。着眼点に驚きがあり、
共感があり、そして食欲への刺激があります。
四六時中食べ物のことを考えている人間からす
ると嬉しくて仕方がありません。弱点があると
すれば、読んでいるとお腹がすいてくることで
しょうか。とりあえず、今夜は鶏とバジルのパ
スタにしようかなと思います。





短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ 食えること、詠むこと

食えることが好きすぎて困ってしまうことがあります。

例えば、ごはんを食べに行って注文を決めるとき。基本的には決めることができます。しかも、食べ物の写真を眺めるのが好きなので、放っておくとずっとメニューを眺めてしまいます。何択かに絞れたとしても、選ばなかった方を食べない世界を想像すると無意味なさみしさをおぼえてしまい、踏ん切りがつきません。なので、後悔を減らすためにも、同行者やお店に迷惑をかけないためにも、ざーっとメニューを読んだら一度考えるのをやめ、店員さんに注

文を聞かれたその瞬間に食べたいものを注文します。この方法を編み出してからは選択の負荷も時間のロスも随分と減りました。それでも、心の奥には小さなわだかまりが残り、（ああ、カニクリームコロッケも美味しそうだったな）などと小さく思ったりするのです。

こんな調子で生きているので、基本的にごはんのことを考えながら生活をしています。作ることも食えることと同じくらい好きなので、何を食えるか、何を作るかが頭の中でぐるぐると旋回をしている状態なのです。

短歌を作るようになって八年が経ってしまいました。その間ずっと食べ物の歌を詠んできました。頭の中は基本的に食べ物のことで満たされているので、当然と言えば当然です。食べ物の短歌を詠むのも楽しいのですが、読むのも楽しい。他者の食べ物への言及を読むと、みんな食えるの好きだよねと思い、なんだかうれしくなってしまう。

蒸し鶏のバジルパスタがわたくしの前に来るまでの遙かな旅路 飯田彩乃『リヴァーサイド』

夢八夜

池田竜男

少年は齒抜けトンネルくぐり来る天使を知らず舌はさみ込む
5歳の子だけが操るフォントありそのことを秘匿する鏡文字
指がえる鼻口めりこみ指じい受け口あけてもぞもぞ話す
尾けるならふとくみじかい指の人きつとたくさん獣をこねて
みどり児のあーとかうーが渡る橋同じ児の手が壊そうとする
傘袋傘がなくても傘袋傘忘れても傘袋取る
水色の根のない造花植えられた花壇の前に座る子がいる
午年の子どもがシャワーのノズル外しキリンの首を刳り抜くと馬

「我」

石川順一

乱打して他意はなけれど我意は有る舌が空へと昇って行けり
悪いちこ居るかも知れず酒を飲む笑う時には酔って無いから
遠足の終わりの列を眺めれば五条川の鯉が偲ばれる我
部屋に居る人形はロラン・バルトが好きサルトルが嫌いな我
根が無くて新芽が噴き出すバラが有る赤と黄色が母音を成して
爪切りが戻って来ない日曜日の再放送が床屋にちなんで
図書館の貸し出しリストを取り忘れ人が死ぬとは思わなかった
水やりの水が溜められるゴミ箱は元ごみ箱で思い出が無い

ついてくる沢庵をむしろ食べるためカツ丼頼む
こともありたり 生沼義朗『関係について』

魚村さんの歌は直球に食べ物の歌。鱸のポワレとほうれん草のリゾットという感じでしょうか。白と緑のコントラスト、それをフィッシュスプーンで一度に掬う。正しさに溢れています。美味しそう…。「鱸の身」がまず提示されて、続いて緑色のリゾットがその下にあることが明示されることでカチッと映像が立ち上がります。

飯田さんの歌は眼前のバジルパスタの背後にある時間が提示されます。蒸し鶏のバジルパスタの前提として、生きている鶏が存在し、摘まれる前のバジルの葉が存在します。散文的に内容を書くと当たり前のことを描いているのですが、どこか詩的な強度が感じられるのは、結句の「遙かな旅路」の力でしょうか。鶏の前にはさらにその鶏の親鶏がいて、さらにその親鶏が…、という悠久の時間をも想起します。

生沼さんの歌には妙な納得感があります。カツ丼が主役で沢庵は付属物、なのけど時にその付属物がたまらなく魅力的に思える瞬間が存在します。でもそれはあくまでもその時だけのこと。基本的にはカツ丼を食べたくてカツ丼を注文するのですが、沢庵が食べたたくてカツ丼を注文すること「も」あるのです。

屋上猿部Ⅶ

宇祖田都子

水滴が最高点に静止して落下し始める瞬間が猿
祭壇に伽羅焚きだめて三本の腕で奏でよ連弾の曲
昭和なら隠れ煙草の指定席眼下は錆色亜鉛の大河
階段を作る傍ら井戸を掘る緯度と経度を確かめながら
屋上の中空にある窓枠は吟遊詩人の捨てたイメージ
野球部の廃部になれば風紋の捕捉網かもバックネットは
残像は眼科の窓の磨硝子今朝焼け落ちた吊り橋の跡
屋上に立つバス停に似たるもの繋留所てふ文字は掠れて

風の歌

泳二

そこにある小さなものが字や声や絵や片言の小さな風が
去年よりきれいになった寝室で Bluetooth に降るなごり雪
見た夢の話をしてるイギリスのどこかの川で釣りをしていた
君らしいうそだと思うほんとうにいらなさそうにいらないう言う
ネコの絵を描いてみせたら笑われた コーンスープを作った 薄い
君がいる世界で降っている雪が小さな部屋をまっしろにする
僕たちは二十四時間歌ってるうそつきには聞こえない言葉で
この風の向こうに君の声がする ああ、僕はもう春を待てない

五十路の境界

大坪命樹

気がつけば空へぞ続く命なる 塵の作れる仏の家へ
五十路にて己が人生顧みる ただ一思ひのまぼろしのごと
百歳の祖母を思へば寂しさと覚悟の推されど境地ぞいかに
生き跡は世界を感じしわが記憶 老いて偲べばあな楽しきかな
わが人生ちはやぶる神の手によりて時空間にぞ刻まるる綾
きみとわれ愛の暮らしと執筆とともになしきは永遠の真実
死のあと意識は途切れど人々のこころの因果となる浮世なり
永遠の如何ならんか 無常なる仏すべての因果の流れぞ

walking

岡田奈紀佐

大袈裟に喜んでみるガス管の入れ替え工事が終わった道を
気楽さの象徴としてスウェットの袖口にいる毛玉の大群
ファミマよりセブンは遠いポケットの小銭でホットコーヒーを買う
そうだけガスとは昔ジョナサンでその前はまだ生きてなかった
おそらくは知らない人とすれ違う この世界には他人が多い
軽やかにさえずるスニーカーを履くわたしも誰かの知らない人だ
眠たいと眠いは違うマフラーにうずもれながら今は眠たい
街路樹が風のかたちに揺れるので来世がなくていいと思える

ビスケツトが二つ

がね

ポケットを叩くとビスケットが二つに割れて元にはもう戻らない
月光が太陽の偽物である事実に慰められている
溶けきつてしまえば誰も気付かない かつて雪だるまがあった道
もうすぐに桜になる木 履歴書に一行ずつ足すわたしの破片
雛鳥が右脳の隅に住んでいて抱き締めるため聞くカンパネラ
中吊りが訴えかけてくることを知らないで良かった小学校
ひまわりに月の光を問うようであつたしに君は残酷だった
行き路で見えてなかったポスターの俳優すごい笑顔をしてる

オンライン句会

涸れ井戸

たんと進むオンラインの句会モニターの人カタカタ動く
点数は気にしてないが最下位で気にしてないが気にしてるかも
だんだんとスマホが熱くなってきた安全のため電源落ちる
打ち上げもモニター越しで「それは何？」死角の酒を尋ね合つて
眼鏡から老眼鏡に掛け替えるきつと誰にも気づかれなくて
きっかけはネットやテレビ音楽や好きなノベルの話も楽し
ピーポーとバトカーの音自分家か誰かのどこかパツとわからず
来月も参加したいとツイートす明日のことも分からないのに

いいサゲが思いつかない私らに
で一粒、涙が怖い

深山睦美

落語をモチーフにした連作の八首目の歌。下の句は「まんじゅうこわい」のサゲをオマージュしたものかなあと思いました。「怖い」に「ほしい」とルビが振つてあるのが好きです。私も連作を編むときに、一番最後のほうにお涙頂戴系短歌(?)をつい持つてくる癖があるので、めっちゃ分かります!でも連作のサゲにお涙頂戴系短歌ばかり持つてくれば、似たような連作になっちゃうから「怖い(こわい)」んですよね。くわばらくわばら。

一首評

西淳子

すべてわかったつもりの笑いがこみ上げ
る冬の三角州に立たされて

虫武 一俊

破調だがさりと読める韻律が心地よい。上句は七／八／五か。下句は句跨がりの七／七。暗示された大河とも接続する読み味だ。ドラマチックな(冬)三角州は、自分には大阪や広島等の都市たるデルタ地帯とともに北国の小川の、ごく小さな三角州の両方が想起された。そこには、分岐や自己矛盾、そして削られるような肌感が横たわっているように、だからこそ主体は、全て解ったつもりで笑むのかもしれない。

一首評

西鎮

世の中は私がいなくても回る 家の周り
をくるくる回る

悠佳里

主体がベビーカーのなかの赤子とともに家の周りを回っている。気の遠くなるような寝かしつけの時間を過ごしながら、母であること以外何者でもなくなつてしまった自分を虚しく思う。我が子への愛しさと、その一方で、社会との繋がりが途絶え苦しむ主体に強く共感した。上句と下句で結びを揃えたことで、主体の描く円の動きと反対に社会が回っているような感覚を覚える。素朴な歌だが、悲痛さがひたひたと迫る。

一首評

塩本抄

「換気せよ」「黙浴せよ」の貼り紙にイエ
スも風呂で笑い給うや

chari

テーマ詠で、コロナ下の「暮らし」を詠んだ歌。「せよ」という命令形の貼り紙は、キリスト看板「神と和解せよ」を思わせる。イエスが再臨し、コロナ下の湯に入ったならば、貼り紙の強制力に苦笑するであろうかという疑問。また、「換気」はベートーヴェンの交響曲「歓喜の歌」(シラーの讃歌「歓喜に寄せて」というキリスト教世界の作品を思わせ、「黙浴」というコロナ下の造語は、沐浴(洗礼)に音が通じる。

一首評

高橋良

「ただいま」とドアを開ければ静寂が子
犬のように飛びついてくる

西淳子

待っている人がいる設定での「ただいま」か、誰もいなくても習慣として発する「ただいま」なのか。ドアを開けて突きつけられたのは、静寂と名付けられた孤独、しかも小犬が待つてましたとばかり飛びつくような圧倒的な孤独と読みました。もしくは一日の喧騒に疲れ、落ち着いた空気を求め帰宅し、一瞬にして解放された心かもしれません。どちらにしても実体を説明しにくいものに作者が与えた比喩が光っている一首です。

一首評

杜野詩季



一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

ドライビンググローブのまま触れられて
朝まだき冬の香に惑いたり

五十子尚夏

青白い月の光を感じさせる連作のうちの一首。冬の
早朝、地平は白み始めているもののまだ空は夜の色
を残している頃、車に乗り込むと恋人がドライビン
ググローブをつけたまま頬に触れてくる。エンジン
をかけたばかりの車内はかすかにガソリンの匂いが
して寒く、唐突に触れる革手袋の冷たく硬い感触が
主体を戸惑わせる。「冬の香」は嗅覚で感じるもの
以上に、主体の持つ漠然とした寂しさや不安を表し
ているように感じた。

一首評

佐藤水魚

アルバム哲人と隣の哲人を見比べて
いる哲人の彼女

がね

「哲人」は、「てつと」という名前として読むのが字
数としても合っているが、「てつじん」という賢者の
意味で読むのも趣がある。前者では、恋人の幼少期
を愛でている微笑ましい一場面。後者となると、哲
人の想い人となるくらいに女性が若かりし頃の彼の
面影を鑑賞している、厳粛な場面となる。
「哲人」の語の選択が良い。これが「太郎」や「成志」
では、ここまで深みのある一首にはならなかったろ
う。

一首評

中村成志

冬晴れにひとりで生きていくことを決め
てこころはしんと澄む湖

千原こはぎ

千原さんの歌は、本音のような口語的文体で、女性
心理を飾り気なく表現している。この歌は、しかし
ながら心境を表す情景を挟んでいる。まわりの言葉
から浮き立つ「しんと澄む湖」が、読者にどのよう
に受け取られるか。これは実景はなく喩えである。
無論、心理学では湖というものは無意識を象徴する
ものとされるのだが、それを知らずとも歌を味わえ
る何かがほしい気がする。そういう意味で、どこか
不安定さの感じられる歌である。

一首評

大坪命樹

第三のビール掲げてディオニュソス型の
人らのつどへる路上

寺阪誠記

連作「おんじき」。十首それぞれに、焼きそば、コーラ、
メロンと生ハム、納豆、米つぶ、にぎり寿司、ビール、
珈琲などの食べ物を散りばめて面白い連作に仕上げ
ている。巧みである。軽妙である。湿っぽさを寄せ
つけない作りがなによりも魅力的である。なにしろ
世界にはウェットな歌が溢れているのだから。油断
すると、引用歌のように、すぐにディオニュソス型
の人らが集まってくるのだから。注意、注意、注意！
とわたしは思う。

一首評

雀來豆

無回転寿司のにぎりは口中にかたちとど
めず咽喉をくだりぬ

寺阪誠記

「回らない寿司は旨めえな」みたいな元も子もないこ
とをかくも大仰に言うナンセンスの妙。こと飲食と
いう行為に関しては、過剰さの諧謔というような類
型があるようで、先般の歌会でも斎藤茂吉の「乳の
中になかば沈みしけれなぬの苺を見つつ食はむとぞ
する」が挙げられた。にしても初句の「無回転寿司」
に惹かれる。確かに「回らない方のお寿司」などと
言うけれど、言語化されることで、くらくらするよ
うな眩暈の感覚がある。

一首評

五十子尚夏

人の少ない植物園

河岸景都

まちがい

君村類

しつとりと乙女椿は咲いている人の少ない植物園で
都会から逃げるみたいに帰省してストレリチアの頭を撫でる
温室の気温に慣れるまで歩く外の世界を忘れていたい
見たことのない花たちの雑談が聞こえるように息を殺した
百円の入場料と引き換えに南国の木の学名を知る
真四角に赤い煉瓦で区切られた場所の幸せ赤薔薇に問う
対話する人もないまま植物に囲まれている正しい時間
閉園を告げられるまでいたのならこの一部になれるだろうか

それうすべてを抱いて眠ろう

菊池洋勝

内視鏡飲める淡淡しき糜爛それらすべてを抱いて眠らう
淡雪の日と言付かる引継ぎ書それらすべてを抱いて眠らう
淡月の理解が及ばない破約それらすべてを抱いて眠らう
淡色の個室で点滴が漏れるそれらすべてを抱いて眠らう
生命維持装置付ける淡水魚それらすべてを抱いて眠らう
腑に落ちる淡麗辛口の麦酒それらすべてを抱いて眠らう
科学部が拵へる淡竹の蜻蛉それらすべてを抱いて眠らう
洗濯ハンガーの淡柿を揉むそれらすべてを抱いて眠らう

春に立つ

玖嶋さくら

キスをするみたいにひらく唇に春の微熱のしろき錠剤
アレジオンふくめば春はミルクいろ夢とうつつのベールの中に
三度目の春のひかりのあいまいをキッチンカーに飲むレモネード
雑草の息吹の声に立ちどまるあなたみたいな歩幅がほしい
野花にもなまえはあると跪ききみの視線は神様のよう
硝子越し「これをふたつ」とべにあかの苺のタルトきみに似ていて
街角はやわらかな風しのばせて角をまがれば待ちぶせる春
うつりゆく四季もつ国に生まれきて桜前線まつ春に立つ

ピエロなら殺して埋めてしまったよサーカスはもうここには来ない
山を降り町に流れた神様はすぐ神様をやめてしまった
寝室が暗いあいだは知っている明るくなると忘れてしまう
流されて自分を見失ったあと代わりにずっと見てくる視線
公園や古びたビルや歩道橋生きてなければ雨の日が好き
夜はもう深くはならず燃えにくい素材へ順次置き換えられる
その庭の花のすべてが造花だと誰かが気づく前に滅びる
親子丼たぶん三くちで飲みこんで蛇なんですよわたしの前世

御堂筋

桑井ゆた

自販機の「あったかい」で火傷する冬、半袖の外国人は、
雨の日の曇った話のあらましを忘れそうだからメモは取らない。
1年後に燃えて消えゆく便箋をあなたへのラブレターにしましょう。
ペルソナは英語で言うところのPersonで、ペルソナ、ペルソナ、みんなペルソナ
向こうには道頓堀のネオンサイン。雨が降るから休憩しよう。
側道は路上駐車で狭くなる南向き一方通行。恋も。
天と地はミルフィーユ状のパフェの中。地下鉄の下は銀河鉄道
暗闇に潜り込んだ地下鉄はオーケストラの終わりみたいに、

航空障害灯の明滅

紅坂紫

赤に染め直して、ええやん、と呟く爪の先からこぼれる朝日
ものもらいのことめばここに言いかえ独立国家大阪とした
外つ国でオオサカは格変化していつか本当のこと忘れて
きみがたこ焼きを転がすのが上手く引つ越そうかと考えていた
梅田には梅田らしさがいないことが逃避行券一枚になる
かっぱ横丁を吹きぬく風をたべ実はかっぱを見たことがない
強くなりたかったし走りたかったレオバード柄と鈍器ブーツ
「知らんけど」言い添えるごとく繰り返す航空障害灯の明滅

東京

さくういりこ

人間は蟻だし犬は死なないしその上ヤバイデカイ猫いる
休日に横断歩道の痴話喧嘩見遣る（わたしはクレイプたべたい）
首都高に取り残されたヘッドライトのおよそ半分は魂
快速で委ねた体が速すぎて心は駅に置き去りのまま
宝物のようなネオンも集まればインフレ起こしてゴミのようだね
情報の氾濫地帯で溺れそうのまま青い魚になりたい
忙しい通りすがりの女にも等しく星の降る夜であれ
何者になるための街で何者もなれぬ私が寝坊する朝



母娘にも濃淡ありて春の日にシチューの香りがゆっくり上る
淡々といつも通りの順番で猫があざとく寄せる体温
重なった紗の音かるやかに濃淡描く白魚の指
裏切りと言うには淡い期待して待っていた青い世界への鍵
歌会なる木の上寒き風受けて渋柿の短歌木淡になれ
如月の雨の淡さに包まれて原野には逢瀬の二人のみ
横腹を扉に沿わせて曲がる猫あとをつけたら春とのあわい
とりどりのアドバルーンが淡い空さえずる鳥と一緒にたゆたう
感情は膨大な時間で薄れゆき今日をなぞる明日が始まる
淡い色のワンピースだと浮くかしら廃墟で淫らなパーティーなのに
犬を抱き悲しいニュースを遮断する淡く静かな雪解けを待つ
淡彩で描いたサザエは影を消し空中散歩を楽しんでいる
床暖房に寝つ転がれば川岸に打ち上げられたピラルクとなる
紺碧に星またたいて空白むうすべにの空に街はめざめる
サクラサク 学友になる僕たちの仲 濃くなるか淡くなるのか
薄墨桜ちってちってよ手のひらをけしてけしてよあなたがいない

- ◆ 深影コトハ
- ◆ 衣未
- ◆ 水也
- ◆ 虫武一俊
- ◆ 六浦筆の助
- ◆ 村田一広
- ◆ 杜崎ひうく
- ◆ 杜野詩季
- ◆ 矢野目知桂
- ◆ YUcAll／古都梨衣子
- ◆ ゆや ゆき
- ◆ 龍翔
- ◆ れいあむ
- ◆ RvelvetCake
- ◆ 渡邊知博

テーマ詠 「淡」



淡水魚図鑑開けば早春の窓辺に泳ぐフナやらコイやら
 婦人服売り場に淡い色のかぜ春は間違いなく来るらしい
 てのひらで果てる淡雪（逆再生）わたしが春へ濾過されてゆく
 水彩のような淡さで夜が明けてたぶん今日から春なのだろう
 春風に運んでもらうシャボン玉 淡い期待は弾けなければ
 淡い色で花を描くとき心を行き過ぎる原色の嵐
 あれはそう淡いだけの恋だったあなたのことを今も想って
 逢坂を越えれば眩し^{あはうみ}淡海に^{おおつのみや}大津宮は眠りたまへり
 淡墨の桜に春をみるように灰色の日に落ちる花びら
 平和とは戦火の星のビブラート カウンターテナー勝ちて還れ
 あまりある愛を重ねて上がる熱あなたの声は淡い赤色
 黙々と塗りたくってくぼかしてくペイルブルーに滲め明日よ
 赤い糸透けるあわいろネックス空に掲げて僕らの星座に
 去る冬に弔いするよう天使らがやさしく真夜中降り立ち、淡雪
 炭酸が淡い空へと消えていくように終わったささやかな恋
 暗闇を暗闇のまま映し出すフランス山の淡い電灯

- ◆ 西村曜
- ◆ 薄荷。
- ◆ 葉村直
- ◆ 早月くう
- ◆ 雛河麦
- ◆ 平塚さつき
- ◆ 平本文
- ◆ 廣珍堂
- ◆ 飛和
- ◆ 笛地静恵
- ◆ 福山桃歌
- ◆ 藤森岬
- ◆ 細川エリカ
- ◆ 真崎あや
- ◆ まさけ
- ◆ 御糸さち

デイスタンス

佐藤氷魚

化粧品フロアでカタログ携えて佇む人の瞳の虚ろ
 車窓から差し込む冬の十五時の穏やかな陽のようにひとりだ
 あの夢に不時着したくて戸棚から浅煎り豆の缶を取り出す
 来る明日を遠火事として眺めつつ五分きっかり歯磨きをする
 常闇にときおりひかる柔肌の衰えながらここにあること
 会いたさの同心円を描いては小石とともに沈む星たち
 デイスタンス 拡がる世界のテーブルの下で繋いだ手を忘れない
 会うあても望みもないがとりあえず駅の階段踏み抜いてゆく

しおみず

汐射ハルカ

くやしさを嘯み下せないむなしさは降り積もりゆく焼け落ちた夜
 どうしてか涙が流れて止まらない軌道敷内通行禁止
 世の中という名の海のお底をもがきもがいて絡む海藻
 うめぼ志と白飯食べる潮騒の時を経るたび純情が減る
 しょっぱいな塩はしおつていう以外ないなしかめっ面がずらりと並ぶな
 風にのる声を波間に聞き流し生きながらえる海松か鮎か
 目覚めれば涙がながれ流れ落つそれは殺したあとの鎮魂
 No matter what the outcome, 飾られない鯛の頭 それでも僕たちは明日を生きる

ワーキングマザー

塩本抄

加害者にならないために休むからいつも誰かが欠けている部屋
 空席に積まれた書類をめくりつつジョーカーでないことを祈った
 2歳児は17時には泣くという 分かっているすごいですね、と先生
 生き延びる約束をして残業の顔ぶれとなるワーキングマザー
 起こさないように寝室を覗けば子らは夫の腕で寝ている
 リビングに洗濯物の山がありその中心の愛を掬った
 だとしても時短ときどき14時間勤務って何 月がぼやける
 園舎から一番星を指差して春に向かって歩いて帰る

ひかりの舟

鹿ヶ谷街庵

すっぴんでしゃぶるあなたと目があつてそのまま朝のひかりの舟へ
 犬ぶぐり摘んだあなたの目の奥へ僕の記号が飛び込んでいく
 あのとときのトトロのまねをしてよってベッドの上でなにをいきなり
 性欲を指の先から嘖きださせこの世の闇の起点へむかう
 おたがいの恥ずかしい骨ぶつけあい変な顔してうめきあう夜
 散らばった星のかけらを包み込みティッシュを夜の裂け目に投げる
 梅干しの種飛ばしあい抱きあった消えゆく無垢な惑星の上
 東京を離れてしまう君のためすこし傾いだ背骨をなぞる

くちびるが痺れたままの窓口で言われるがままお金を払う
街までの切手だろうが右肩の雪をひとひら融かし立つ春
掘り出してある消火栓誰であれ誰かに護られてゆく明日
オデッサの少年の眼の灰色のどうしようもなく人間の日の
難くようにぼくの言葉を遮って兄が宿した戦争がある
出せなかった手紙みたいに灰になるさつき真つ赤に燃えた吸い殻
変えようとしても変わらぬ夜を抱きさくさく白髪葱を刻んだ
シヨ―シャンクの空にを久しぶりに観る 越えられなかった壁のざらつき

キャットウォーク

雀來豆

粗大ごみ置場に覗く斑猫の黒白ゆかしハチワレ模様
マン・レイの毒匂いたつチェス盤にポルカ・ドットのような傷痕
おそろしき詩形なるかな足元の猫のしっぽのはてなのかたち
迷わずアルチザンになる。人のことごとくが迷う迷路を造る
塀の上に並んだ猫の真つ白きたぶんしをしないからだよ
相聞歌ツイートすればたちまちに形容詞から古ぼけてゆく
くるおしく啼きあう猫の影消えて全員巨匠！展のポスター
OM NOM NOM 匙のくぼみをみつめれば敵はもつと遠くで光る

大雪の恐れがあると首都圏のニュースが映す八王子駅
ラジオから聞こえる救急車の音の続きが窓の外から聞こえる
壁に映る影のぼんやりした部分いつでも俺は俺のまんまだ
一生を単焦点で撮り溜めるカメラがあれば全てをばかす
下の方ばかり蜜柑は傷みゆく助けてやろう二本の指で
牛乳のパックは紙でできているお風呂も紙でできると思う
プルタブを乱暴に引く指さきに込める怒りの一瞬のこと
録音の自分の声を聞くたびに俺が知らない存在を知る

動揺

諏訪灯

雪上を歩いてはずむ足あとを残す時間は切り離された
冬眠を終えて地上に出たリスが戸惑うような春はいらない
この空を辿っていけば昨日見た動画の中の戦場に着く
立ち上げた直後のページのグーグルをB B Cに変えたブラウザ
夕焼けの空に暮れずにいて欲しい夜を恐れる人たちのため
また明日も八割くらい今日に似た日だと信じて眠りへ向かう
その闇を眠りや愛や休息のためだけにこそ使いたい夜
無力さを補うように目を向ける遠く離れた国のニュースに

いつもいつも後回しだった熱情と淡いパジャマを着て夢をみる

あはあはと綿雪のふるきさらぎの静寂^{しじま}を裂いて赤灯のゆく

三月の淡いひかりに目を閉じてわたし以外のすべてを拒め

壁に吊るされたティーシャツ透かしつつ古着屋を淡く春がつらぬく

そろそろとこの淡雪に覆はれてしまへ交通公園の汽車

淡雪が舞い散る朝に別れ告げ旅立つ君の背中^{うしろ}は遠く

淡いブルー二人乗りした背景が後ろに飛んで影を重ねる

店頭^{みせ}に淡い色した服たちが並びだしたら春がはじまる

濃い夕陽うすい夕陽のツイートがあるとびきりの平凡がある

幼子に買ひしパステルカラーの粘土落ちて固まりし粒を拾へり

淡路へと向かう車が追い越した蝶は遅れて春を運ぶよ

洗いたてのシロとふたりで土手をゆくあわく色づく春を纏いに

淡きいろ重ねて青くなつていく空に向かって歌えぬ子らは

実直な淡水魚のごと愛しますわれの生まれた海なき町を

怖ず怖ずと拾いにゆけば淡水と呼ぶには肌をまさぐる沼よ

淡酸と書き間違える。開栓したペットボトルのなかの淡雪

◆ 塩本抄

◆ 紫苑

◆ 鹿ヶ谷街庵

◆ 西鎮

◆ 雀來豆

◆ 白石 夜花

◆ 鈴木ベルキ

◆ 諏訪灯

◆ たえなかず

◆ 高橋良

◆ 田中翠香

◆ 千原こはぎ

◆ chari

◆ ともえ夕夏

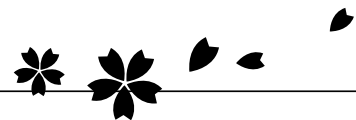
◆ 中村成志

◆ 西淳子



「淡」

テーマ詠



早春のあかるい風は花花のあいだで淡い香りを羽織る
 水すべて知ってるつもりで回遊す山手線の淡水魚たち
 病院の帰途で見つけた淡^{おうみどう}海堂次回は此処へ！ケーキを食いに！
 淡水を選ぶ魚を責めるのはとても悲しい、悲しいことだよ
 Boys, be ambitious. 装備は完了、パステルカラーの強かなこと
 長嶋や王は疲れる たまに打つ淡口ぐらいのポジションがいい
 木淡の様子気になる人の疫鶏舎で殺処分が始まる
 踏んだのは淡雪だからもう少しあたたかなればただの友人
 薄紅のさくら湯あわく燻らせて嫁ぎゆく日は近づいてくる
 生前はRGBだったあなたも今ではCMYKで暮らす
 淡路島を構成する三つの市とは、淡路市、南あわじ市と何？
 鰻丼は炭水化物と淡水魚されど結局うまいのはタレ
 じんわりと対流生まれるフラスコを覗きこむ子に水の陽炎
 開演のベルを待ちつつ弦をはじく舞台袖では誰もが淡い
 淡き黄と淡き青たる遠き地の硬く冷たき春。涙と血
 淡くなくはかなくもなく確固たるそんな決意がもろく崩れる

- ◆ 音平まど
- ◆ がね
- ◆ 廻れ井戸
- ◆ 河岸景都
- ◆ 神崎梓
- ◆ 神定 克季
- ◆ 菊池洋勝
- ◆ 君村類
- ◆ 玖嶋さくう
- ◆ 桑井ゆた
- ◆ (答え…洲本市)
- ◆ ノロ
- ◆ 咲兵衛
- ◆ 佐藤水魚
- ◆ 佐藤博之
- ◆ 汐射ハルカ

ロンリーハピネス

たえなかず

剥がされるレタスの二枚目あたりから冬が生まれてすぐ消えてゆく
 しろたえのシャツをいちまい引つけて寒がりさえも絵にしてみよう
 過去形が上手ねあなた私との日々を「去年」と完璧に言う
 冬陽より短い恋だ 夜半過ぎ一行だけの報せがとどく
 花野行 リツイートされゆく写真それでも春に死にたくなる癖
 春愁 短いですが近況を贈りますので棄ててください
 ほんとうにきれいな時間ほんとうにかなしい時間 午後四時の空
 思い出にならないいちいさな出来事を淡いと言だけで捨てるね

早春賦

多香子

春の日の写真に写るわたしの胃びわ湖のかたちに伸びきっており
 張り紙に「貸店舗」とある喫茶店だれも知らずにフリージア咲く
 三月は新入り猫の食費ゆえ春の服さえ我慢している
 コンセントへ伸びるコードに猫からまり、我も寝ころぶ日曜の床
 紅茶葉が踊りつかれて沈むまで三分間の恋の話を
 あの人の誤解もとかずに逃げてきた空には厚い雪雲、寒い
 雨連れて低気圧が通りすぎ蝸牛管がギギギと悲鳴を
 草々と手紙の末尾とじる日の想いよとどけ遙かなきみに

柚子を四つ

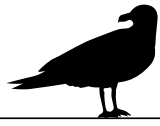
高橋良

上弦の月が南天しをりけり半分と言ひ幼子と見る
 保育園へ子を送りゆく初めての朝はみちのくに寒波が来たり
 学校の庭木の柚子を四つもらふ妻は第二子身ごもり六月
 身ごもれる妻に呼ばれて腹に手を当てれば小さき音が聞こゆる
 賀状来ぬ一月二日身ごもれる妻と水天宮に詣でき
 雪止みし昼幼子とシャボン玉吹きて大玉小玉がありぬ
 妻の腹の中の胎児の分までも雪だるま作り氷柱を鼻とす
 氷にて滑るを恐れ抱かることを望める幼子なりけり

カバ、再起動

田中翠香

ある夜の富士屋ホテルの裏庭に目を光らせて来る巨大力バ
 「来た、ヤツが来た復活だ！」あのカバがまた箱根を荒らす
 「5倍……だどッ！？」カバの時速が100キロを軽々と越え東京に来る
 巨大地下施設に司令の声響く「キリンに乗るか、もしくは帰れ」
 キリン型汎用決戦兵器たる「わんわん号」に少年は乗る
 前回の死闘で使ったバター弾新型カバにかすりもせず
 カバを止める東京湾に誘い込みカバを海へと沈める作戦
 「ああ司令！10200のカバですぞ！！作戦はみな見抜かれてます！！！」



テーマ詠「淡」

碎けるくうい

千原こはぎ

もう何も降らなくなって乾ききるあなたが育てた心の庭は
来る人のない荒れ庭の隅っこにころがる小石みたいなわたし
両足を抱えてまるく固まって心も固まるのを待っている
石ころを蹴飛ばし歩くアスファルト碎けるくらい泣いてみたいな
いつだろう、最後に雨が降ったのは あなたの肩が濡れていたのは
また枯れて終わるのだろうか新しい苗を無言で植え付けていく
追憶の白さ あなたもそのうちに白い記憶となるのでしょうか
たぶんそうだとしてもいい諦めることを重ねてじょうずに生きる

深爪

chari

パタパタと表と裏が入れ替わる玩具のような恋をしていた
さつきより幸せですか安定を求めて落ちて割れたグラスよ
届かないところから恋 中指の二センチ先を空と呼ぶ君
数分で渴死するのだ失ったキャップを呪いマジックインキは
十六夜を舐めとるように隠しゆく雲さえ雲に飲み込まれゆく
何もかも捨てて逃げなきや駄目だって非常扉のピクトグラムが
触れたから失くしてしまったものを弔うように深爪をする
ウミネコも帆翔できないほどの風きみの画像を削除していく

スクールゾーン

月硝子

指挟むガムばかり売るおじさんが時空を越えて付つ通学路
いにしえのベビーブームで膨らんだ校舎に残る螺旋階段
先生やママや男子の「泣くおもちゃ」だったあたしは恋に泣けない
感想文とは魂に課せられた年貢と思う八月の末
背と胸と両手でランドセル運ぶ幼い捕虜を撫でる夕風
耐えかねたアケビは宙に罅割れて夕闇色のため息をつく
両親が離婚出来ない原因のあたしにフードコート明るむ
色褪せたブリクラ帳に平成の作り笑顔が貼り付いている

くろわさん、春ですよ

ともえ夕夏

吐く息のまだ白き日にふたつ咲くサクラ 生命力つてすごい
おきあがり小法師みたいなからくりで揺らげど倒れないクロワッサン
弟は兄を待たずに家を出る 数学に兄弟愛のなき
こんなにもしつかりと立ち麗らかな卒業式に凜としたこゑ
シャーペン借りたまんまだこの部屋の机の奥の虜囚にしよう
変域のなき点Pを掻きあつめ放つどこまでゆけるだらうね
ネイティヴな発言だなあ野良猫の「Not at all Not at all」叫んでをりぬ
自転車のタイヤに空気をぐんと入れ漕ぎだす 書店まですべて春

餞は無色透明 淡水のなみだを泳ぐさかなの尾びれ

思い出は時間で希釈されていくものだからこそ清らかな色

雨の日の午後にあなたが置いてった壇の闘魚は泡巣をつくる

文字上のコミュニケーション淡き日にYouTubeでイルカの声を聴く

やはらかな西洋梨を剥いてゆくてのひらあはくひからせながら

義関節 恋を覚えたパペットは自暴としての淡水に棲む

ノーマイク風メイク風メイク風メイクのあわく剥がれ落ちたり

故郷はつねに濃いもの汽水域越えたうなぎの淡い幸福

淡雪は早春の季語平成はセイセイセイと省略して見る

花束のリボンほどいて薄桃の淡き交わりしばらく生ける

淡雪を踏みて駱駝はゆつくりとじつに駱駝はゆつくり沈む

ふわふわと子犬が歩む淡雪の下には何か埋まってるかも

モノクロの世界が淡く色づいて君の返事はぞんざいになる

昼夜のあわいの桜が咲いている淡々と降る君のいない春

淡い夜もしくは夕方の終わりマクドナルドのポテトが匂う

空白にひらかれる口天井をめぐる星座と淡い眉ずみ

◆ あき子

◆ 麻倉ゆえ

◆ 雨虎俊寛

◆ 新井きわ

◆ 有村桔梗

◆ 歩歩

◆ 五十子尚夏

◆ 池田竜男

◆ 石川順一

◆ 石橋葉子

◆ 宇祖田都子

◆ 卯波

◆ 泳二

◆ ㄥs

◆ 岡田奈紀佐

◆ 岡田濠

ユーミンをめぐる物語

龍翔

青いエアメール届きぬ 選んでも選ばなくてもシネマは終はる
受け取ってくれる誰かを探しては楕円の愛を投ぐ ノーサイド
どこまでも一直線に伸びてゆくひかうき雲はいつもさみしい
カフェオレはいかにもだよとうそぶいて埠頭を渡る風を見てゐた
青空に身を投げ出してゐたらう海を見てゐた午後でなければ
過ちを犯すあなたと過ちを許してしまふわたしの輪舞曲^{ロンド}
強がりなダンデライオンきずつけてきずつけられてふはふはになる
翳りゆく部屋でふたりは水入れのなかの絵筆のやうに佇む

雪にうそぶく

れいあむ

『すきでした』見知らぬひとの片恋の叶わぬを知る春の机で
独り咳随にくゆる白梅の酸いか甘いか如月のよる
あけめやみ往きつ戻りつ笑い声 SOS ならあの日出してた
六片のつめたいほどの優しさを知りたくなくて不惑になって
風すさび雪すさびてもいつの日か花はひらくと胸にさだめて
「路さえもあやしくなった」と祖父の云う皺くちやの手にはふきのとう
さくら花手折るもみじを腕に抱き父よそれでも莫迦になりたい
陽のあたる道しかゆかず暖をとりおれもつらいと雪にうそぶく

水生生物と

ナイアガラすすぎ

水色が広がっているよっていう君もその水色の一つになったの
ゆれてるものものを見てるもしかして…相対性理論 僕がゆれてる
こどもにうたを教える父親の昼よりやわい響きのうた
フィルムがもったいないよ 「もういくね」 日の光を撮りやめないまま
青硝子大影たゆたふ白が降るしゃなりしゃなる水生生物と
スピーカーからジャズピアノが聞こえてるレストランで本気のグラタン
たたたんつ、つて歩くと靴が響く 暗い橋だつてちよつと笑った
気づけば、朝 春の日はただ早すぎて間もないでしょう 気づけば、降つてて

いつまでだろう

中村成志

閉店の花屋の奥に屈まれるさばてん 一果他に陰無し
硬さとは将来だろう先端のうすくれないの椿の蕾
滅するは生まれたがゆえ数珠成りの刻を一粒ひとつぶ繰って
群青のわずかに濃さを増す空よ風の鱗が日射しをうねる
ポケットにふくら雀の二、三個を指でまさぐりつつ霜の坂
あたためて吸って包んで擦り切れて服はほりこりとなって陽を舞う
仕付け糸いっせいに抜かれ白梅の花 北の根に霜残るとも
ドアノブに積もる花粉よとりあえずとりあえずがありいつまでだろう

第二故郷彷徨

渡邊知博

駅ビルで昼食をとる目の前をいそいそといく魚たち見ゆ
先頭でぼつとしてればバス停別にどこでも降りられるけど
春だけの臭いが脳に傷つける鼓動で満ちた日だまりを行く
幾度も歩いた道を辿るうちすつかり道を失ったみたい
このまちに生きていたんだ私ともういなくても進む生活
公園のベンチやさしい青空がこわれていくまでつつんでくれる
終バスを逃したゾンビのよたつきよまだ生きている私を追って
大学生がたむろしているコンビニの明かりが今日は救いになって



とおくにはいけない

ナカムラロボ

チューハイを片手に夜を歩いてく二人は鳥に見えるだろうか
ほんとうは子どもが遊ぶ公園で声を抑えて笑う 歳だね
ブランコを夜風が揺らすいや夜風じゃなくて空を見る君だった
いつだってさびしく笑うひとだから あの星はもうないかもしれない
すかすかのポンペを換えにいくように酒をくださいファミリーマート
なにひとつ繋がらなそうな夜だけどきつと明日になつてしまふよ
街灯に照らされている影だけがたまにくつつく それがかなしい
すこしだけ歩幅をせばめ後ろから夜に消えてく君を見ている

ゴールデン・レトリバーと三毛猫

西淳子

ゴールデン・レトリバーがじゃれてきてああこれはもう春の襲来
玲という名前の猫を飼っていた心音さえも美しかった
「くんぷう」と犬に名付けるくんぷうはのはらをはしりまわるのがすき
『100万回生きたねこ』の英訳が“A cat has nine lives.”
「ワンちゃん」ときみが言うたび現れる犬に首輪をつけておきたい
やわらかい風がすりすり。人生でもう何度目の猫の風葬
大型で非常に可愛い犬2号、勢力を保ちわたしのもとへ
コンビニの駐車場には猫がいてときどき誰かにツイートされる

ムーミンたちの、あるいはぐりとぐらの

西村曜

人間がふたりしゃべればそれぞれのカップのお茶の深さそれぞれ
ムーミンのカップはわたしスナフキンのカップは夫ふたりは友だち
ここはわたしのところで庭で生活で夫以外は誰も訪ねず

降る雨を一滴残らず受け入れてぐちよぐちよになる庭でありたい
もうながく土に触っていない手であなたに触れる土にするとして
ベランダを庭と呼んだら涼しくて今朝の庭にはひよどりが来た
こんどさあきいろいろのカステラつくろうよ金目の物のようにきいろい
ぐりとぐらみたいに暮らそうときどきはページの外でひとを憎んで

たまねぎ

ネコノカナエ

春ゆうベポテトサラダのたまねぎがきらいなひとに鍵を手渡す
たまねぎがきらいなひとがたまねぎの悪口をいう（見た目は褒める）
くうかんは開かれていてあのひと眼鏡をしてもたまねぎで泣く
たまねぎのスライススライス透きとおるひかりはからいからくてすてき
さらしたらからみはぬけてしまだろうそれでもひかりひかりはひかり
もちあじは塗り替えられてたまねぎの酢漬けはぼくも苦手でしたよ
たまねぎは甘くもなるし溶けもするぼくは器用に立ち回れない
たまねぎの面影うすく春ゆうベサワークリームオニオンを食う

ときにビールをときにワインを

村田一広

トレイへと次から次へ押し寄せてつねに焼き立てクロワッサンは
ユーチューブで見てる限りは食べ放題食べれば食べるほどお腹空く
ひと振りの塩はたちまち同化してきらきらきららトマトの小山
太陽が沈みさうですもうすこし灯りともして昼のままにて
みなしごのごとく他人のイニシャルのセーターを頭よりかぶされる
上巻だけが山荘に備はつて下巻は眠る下界のどこか
越えて来たここが国境 古来より雨が雪へと急いで変はる
砂漠ゆくと見知らぬ人が水くれるときにビールをときにワインを

揺れて（式）

杜野詩季

如月の黒ペン重く紙重くそれでも記憶を書かねばならぬ
体育館へ帰宅難民とぼとぼとロケでないのだ雪まで降って
おにぎりを配る先生（ご家族と連絡取れたの？）声にならない
二十二時照明減って就寝が無理に配られ終わらされる今日
寝返りができない幅で横になるしんしん響く三月の床
バイトから離れられぬという君は何ができたの闇夜の部屋で
その揺れは春の微風をかき消した 咲く日を待ってた庭の蒲公英^{たんぽぽ}
連作はあの日の糸で編まれゆき尽きぬ話の一部となって

ビスコ一粒

薄荷。

ももこと退勤の空に泳ぐ雲（これはうれしくない方の雪）
人の気も知らないで降る綿雪にだんだんと街は白く包まれ
心にも栄養補給は必要でコンビニエンスストアの誘惑
コンビニで目が合う赤いパッケージなんだか励まされた気になる
大人でもつよくなりたいと思うこと肯定されるビスコ一粒
真つ暗な空の底から降る雪はビスコのクリームみたいな白さ
ああこれはお母さんの匂いだろうビスコ一粒やさしく甘い
真つ白な舗道を進む足どりはビスコ一粒分だけつよい

干からびたオレンジ

葉月じゃすみん

はじめての彼女ができた一ヶ月くらいで別れたチケット当たった
恋に落ちる速度を忘れマッチングアプリで人を振り分けている
Tinderという社交場はむせかえるファンタの匂いが充満してる
カップルがせまい歩道を埋めていてはみ出している独り身の我
チョコレートパフェはごはんにならないし履歴書に書く特技はないし
フォロワーは113人クレープを食べに誘える友は0人
お前らはいいいな処理をするはずの性欲さえも必要とされて
生まれぬほうがよかった 干からびたオレンジにしかないのなら

暖かな雪

ゆや ゆき

睫毛さえ凍てつく朝に雪晴れと呟いてみる震えて落ちる
雪の壁ひたすら歩くこんなにも積もった雪の眩しい白さ
人生の縮図みたいだ戻れない白地図めいた雪道をゆく
雪庇から下がるつららと青空と命を奪う雪の重さと
砂漠では暖色らしい空の青目に焼き付ける夕暮れの雪
地吹雪で砂丘を描き人影は蜃気楼めく呼吸は荒く
どこまでも寒色だろうまつさらな月の染めゆく木々と雪原
柔らかな日差しは春を予感させ暖かな雪コートに溶ける

陽射しを分けあつて

ゆりこ

紫のカバの夢見た日の朝はケチャップ多めのオムライス食む
台風の前に騒つく森で泣くゾウの足にも似たブナの木々
南国のトリだと思ふ鮮やかさ耳刺す声に足早に去る
遠くから眺めるくらいがいいよねと母の気持ちになるライオン舎
シロクマは飽きることなくトンネルを泳ぐ飽きずにそれを見ている
キリンキリン憂う瞳と睫毛とを詠まれていることは知らなくていい
春の陽を分け合っている午後二時に少し動いたハシビロコウと
帰りにもパンダは寝ている「また来よう」そうそれがまた口実になる

水沫の少女

水也

空に咲く花に伸ばした手は遠く飛沫とともに沈み消えゆく
 幻想をおさなごころのなかに秘め忘れたふりで今ゆくは罪
 くるくるり重ねた指の先だけが触れているからまだ踊れるの
 永遠を纏うあなたはもういないひとりぼっちで漂うワルツ
 花と舞う君を思つて口ずさむ歌は優しく痛みを生んだ
 色のない硝子細工のようだった静かにはらむ狂気に魅せて
 青い薔薇摘んだ真白の指先が描く純度と色ある香り
 もう一度はじめましてが言えたならきつとあなたにまた惹かれてく

失語

虫武一俊

丸窓はくり抜いた窓三月の不安な街に人は急いで
 もうなにに触れても言葉が出てこないおれがおれがと騒ぐでもなく
 ラジオペンチがないから釘を爪切りで抜くようなこともせず釘のまま
 折れてゆく影追いながら遠回りするほど虚飾が身に内に増える
 三月も四月も好きになれぬまま、まばゆいものを目は容れていく
 ピーク時をとくに過ぎて読み直す自分の言葉、薄暗い春
 本当に良い人ばかりに会つてきてここにいるために歌に向き合う
 低く飛ぶ燕の速さ 春という暴力に期待してしまうのか

感光

早月くう

シャッターを切ったそばから遠ざかるひかりを人は記憶と呼んだ
 水底にひかりが踊るようでした視聴覚室のかたすみで
 葉に浮いた雪が ひとつ こぼれ落ち予感ほ正しく残像となる
 ハレーション 冬の陽射しが公園を満たせばなつかしい色温度
 逆光に透けた尻尾のかがやきをいつか忘れてしまうとしても
 川沿いの花の名前を知らぬまま夕日に映える花と覚える
 フィルムを巻き戻すとき暗闇によぎるごく僅かな走馬灯
 忘れてもいいよ、憶えててもいいよ 感光させるようにまばたき

お前はうちの子ではない

橋の下から拾ってきた子だ

ヒブノ寿司マイク

橋の下に青いお家は留守にして茶碗に三つゆで卵ある
 外界とささやかながら区切られた立方体は外気+9℃
 幾千のさざなみ渡る 柔らかい段ボールのその断面の波
 茹でたのを持ってきたのか茹でたのか火気はあるのか不思議に思う
 本当は私が産んだと言いたげにいつもの野良が入って嗅いだ
 上半身落とし剪定されている冬の街路樹扱いにいますか
 じつとりと濡れた靴下履いてると世界で一番惨めな俺だ
 橋の下から拾われた子が傘の電球色の下わらい合う

お菓子今昔、そして未来へ

六浦筆の助

童心をはみ出ですれて生きた吾に森永ラムネは潔く見え
 遠足の帰りのリュックくたびれて「カルミン」だけが清しく^{すが}香る
 涙超え模型仕上げる 「デラックス」付く難解な「ビッグワンガム」
 やめられぬ止まらぬ資本主義がある また食べているかっぱえびせん
 やはり俺なめくじだった醤油飴塩飴だけは受け付けなくて
 「チョコまみれ」買ってリュックに詰めこんで 夜勤やりきるための贅沢
 一息がつけぬ夜勤のイライラをキャラメル一個が手なずけている
 るんると君は「TOPPO」の束くわえ 牧羊神^{ぼくようじん}が来そうな夜だ

たそがれブルームینگ

六厥めれう

吾のこと誰もが知らぬ町へきて孤独はいつも創作の母
 ストーブをつければ窓は曇りゆく 灯油の中に含まれる水
 大型の商業施設建つという但し冬期は休工らしく
 入荷日を三日も過ぎて電話くる 敏捷堂という名の書店
 驚きの名前の由来「妻の名が敏子で私が捷彦だから」
 それぞれに一言ある詩と歌と句 まとめて「趣味」の棚に置かれる
 豆腐屋が来たんじゃないよ子供らが絵本ラックを回す音だよ
 養分を断たれてもお咲き誇れ工場のなき門前町に

犬のこと

平塚さつき

散歩道小さき犬の二度三度後脚にて空を蹴り上げる
 白黒茶色の三使徒がひとりのおじさんを導いていく朝
 振り返らずたしかに歩む老ビートルカフエオレ色に暮れていた
 十年以上生きてたら犬だか何だかわからぬ生き物になる
 虹が出るとあの子たちのところへ渡って行きたいと思う またね
 つらいとき懐かしい色の犬がよこぎって神がいるのだと知る
 見つめれば目で返事され犬の国へのパスポートはまだ有効
 ほんとうは喋れますが黙っています神様に止められているので

明け方

廣珍堂

またたくにあかときづくよとなりぬれば抱きし衣に熱を含めつ
 いまだ雪止まぬままなるあかつきの庭に残るや夜の灯りは
 白き手を御簾に掛けつついなのに背^{せな}の匂^{にお}ひを覚ゆるかも
 如月のほのぼののあけを知らせたる目覚ましラジオのゆるいボサノヴァ
 あかとききにスポーツバッグを肩にかけ小兵の向かふ戦静けし
 かぎろひを胸に受けつつ東^{ひむかし}に星を調ぶるひと並びぬて
 あさばらけシートと腕を抱きしめて太い細いと寝言あるひと
 東雲につひに雪雲去りゆきて明星ひとつ天空清む

春待ちカフェ(準備中)

飛和

ふかふかの生地にじんわりバター乗せ とろりとシロップかけるしあわせ
 クリスマスケーキが帰って来たような一面の白に苺を足したい
 蜂蜜とカモミールの手茶ふわふわと甘さの香る陽だまりのよう
 なめらかなホイップの波に身をまかせ苺は甘いワルツをおどる
 よそ行きはクリームパスタ 同率でパジャマに跳ねるトマトも好きです
 ほわほわの衣とまろいカスタード黄色で包むミモザのケーキ
 苦しみの行きつく先にあるカフェでとびきり苦い珈琲を飲む
 華やかな仲間たくさんいるけれどストロベリーが春の恋人

深夜二二〇二三年二月二十五日

笛地静恵

回る地球の上に寝て電灯を消すある夜のこと
 どうして僕はこんな深夜に君といっしょで結ばれていられるのか
 あまりにも地球の丸い夜だから青い毛布に没して眠る
 記憶の底に黒い沼ありて足の岸辺へ波は寄せ来る
 行列を暗い穴より蝋燭を荒野を果てをラスプーチンを
 あかんぼがぼたぼたと降ってくる無限軌道の国境の山
 お昼どき中華街には混雑のたった一軒空いている店
 あくまでも常と変わらぬ一日をおくるふりして日は暮れてゆく

おくすり手帳

まさけ

ゆめかわいい診察券のケース持ち妹と行く心療内科
 現実ナイフのように鋭くて風の音さえも狂気に変わる
 院内がとても冷たくされていて口元だけがあたたかい医師
 薬局のふとった金魚 幸せをたらふく食べて生きているのね
 悪口をスルーできない妹の5冊目になるおくすり手帳
 癒えるよう貰う薬が増えていき笑顔で説明する薬剤師
 世間から守り抜くため手を繋ぐ鎖のように離さず繋ぐ
 ぎこちなく微笑んでいる妹の精一杯で輝く月夜

はしっこぐうし

御糸さち

枯れ木には花は咲かない 人間は枯れ木ではないけれど咲かない
 遠目にはマンションとそう変わらずに東京拘置所(駅徒歩5分)
 優先席は車両の隅にふたつありふたつしかない車両の隅に
 にわかあめ庭にやにわに降るまひる雑草たちがうなずきあつて
 吸うよりも吐き出す方が難しく死ぬまでは見えない肺の底
 ゆっくりと効く毒が良い引き返せなくなるまでをずっと迷える
 伏せている方が本心 トランプの裏ってほんとにこつちなのかな
 はしっこで頷きながらお砂糖をラカントに替え丁寧に暮らす

ノットフォーミー

福山桃歌

あたまたからたべてほしくてまるはだかになったのにどうして、どうして
 無防備な白いうなじに思いきり囁みついて 忘れられなくなりたい
 満ちるのを咎める視線たりないよたりないねってうなずきあえば
 すきだって言うからあげたはんぶんになってひりひり風が当たって
 ばかなんだ もっと苦しくなるくせにまたけだものになる同じ夜
 すり抜けていくよい虫 そういえばきみの真昼の声を知らない
 おしまいは突然に来る前髪をばさりと切ってしまった深夜
 美しいフォントの名刺に刻まれた一度も呼んだことない名前

三月九日

真崎あや

問診の出産希望に丸をする命の重さを知る右の手で
 夏の日の不思議わたしのからだには心臓二つ動いています
 ペタンこのお腹さみしいここからはきみの一人称のはじまり
 両腕にひとりずつ抱きしめる夜長いトンネルの先導をゆく
 膝枕求めて這って来る吾子よ桜の枝を鳥の啄む
 本当に隣の芝が青くてもわたしに降る雪の白さ軽さ
 手探りの道は眩いこの腕にやわらかなきみ抱いた日もまた
 きみが咲く朝がやがては来るだろうそのときそっと添え木を外す

独裁スイッチ

深影コトハ

突然 終わりの朝はやってきた(あなたが押した独裁スイッチ)
 友達の家で遊んで「飽きたから帰れ」と言われた幼い記憶
 哀しみと怒りのオセロ哀しみに負けぬ速さで黒くなれ心
 芯を持つ一本のキャンドルとなりあなたのいない明日を照らす
 ある年の桜から初雪までのカメラロールはあなたばかりだ
 戻っても二度と戻ってこなくても許すよそれが友達だから
 ゆっくりと三つ編みを解くまぼろしの夏を静かに諦めながら
 いつの日かまた集まって拾い上げようあなたが崩れていたジェンガを

愛情ロンドリング

みなみあ

事務机雑な音符を添えさせて深い緑を着こなす君に
 つるや花が帯びない恋愛するよりもクラシック的な自殺をしようぜ
 ミュージシャンが世界を歌っているんだがサイレンサーがついてる夜景
 上弦月目覚めのように白い手紙にスロウスノウを感じていたと
 葡萄酒の色や形は覚えていない押し付けがましいギターステップ
 ファッションに気をつけているあなたは本棚より少し背が高いかな？
 何本も線路分岐があることに鳴咽を線路の溝に還して
 ぼくが持つ綺麗な曲線もつ愛は水の波紋とおなじだった